
賽銭どろぼう真琴くん

西村真琴

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

賽銭どろぼう眞琴くん

【Nコード】

N5501Z

【作者名】

西村眞琴

【あらすじ】

眞琴は田舎の神社でよく遊ぶ男の子、神社に祀られてあるキツネの神様が好き。友達の弘とは親友だ。

ある日、眞琴と弘が神社の境内で遊んでいると、りさと言う女の子が現れた。3人は友達になって遊び始めるのだが・・・

第一章 キツネの神様（前書き）

ちょっと思いつきで書き始めてしまいました。なので明確なストーリーはありません。思いつくままに書いて行きたいと思います。よろしくお願い致します。

気まぐれ者のサラリーマン素人作者の為、ストーリー展開が非常に遅いです。気長に更新を待てる人だけお読み下さい。

第一章 キツネの神様

真琴は神社の鳥居をくぐると奥に祀られたキツネの神様に挨拶をした。

「キツネの神様、今日はガムあげるしな、後で返してな」

そう言つて左のポケットからガムを1枚取り出すと賽銭箱の上にガムを置いた。

「弘君、ビー玉遊びやるか」

「うん、やるうやろう」

友達の弘と真琴は地面に穴を掘り始めた。
弘は穴を掘り終わると真琴に手を出した。

「じゃんけん、ほい！」

「あいこでしょ！」

「あちゃー負けた、弘が先や！」

「よっしゃー！ 真琴、今日は負けへんからな！ 昨日の敵じゃー」
「帰り討ちにしたるわい！」

真琴と弘のビー玉遊びはいつも真剣勝負、弘は手堅く地道な戦法で、真琴は一攫千金を狙う戦法だ。勝率は弘の方がちよい上だが、真琴が調子に乗った時の爆発力は凄かった。

二人は掘った穴から遠ざかると足で地面に線を引いて、その線上に並んだ。

「よし行くぞお〜真琴！ それえ！」

弘は穴をめがけてビー玉を投げた。

「あちゃ！ 外したかあ！」

弘のビー玉は穴の淵でぐるりと回って神社の木の根元に止まった。

「ほな、次は真琴やし」

「見とけよ弘！ 一発で穴に入れるしな！ 必殺！ 反射衛星投法

！ おりゃ！」

「なんじゃそれ・・・？」

真琴が勢いよくビー玉を投げると、ビー玉は穴の方ではなく神社の敷石の方に飛んで行った。

「真琴、どこ投げてんねん？ あっ凄！」

ビー玉は敷石に当たると向きを変えて、穴の方へ一直線に転がった。

「いけえ〜！」

真琴のビー玉は穴に直撃して大きく跳ね上がり、弘のビー玉より少し奥で止まった。

「わちゃ〜！ 弘の餌食やん！ 最悪やし！」

真琴は頭を抱えた。

「チャンス！ 頂きやしなあ真琴！ 宇宙の端まで飛んで行け〜

「！」

そう言うと弘は自分のビー玉を眞琴のビー玉に思い切りぶつけた。

「カッチーン！」

眞琴のビー玉は弘のビー玉に弾かれて神社の端まで吹っ飛んだ。

「わちゃー!!」

眞琴は両手を上げながら走ると自分のビー玉を追いかけた。

「お先きにい〜」

弘はビー玉を握ると次の穴をめがけてビー玉を弾いた。

神社の端には山の神さんが祀られてあった。

眞琴はポケットからまたガムを1枚取出すと山の神様の小さな賽銭箱の上にガムを置いた。

「はい、山の神様もガムあげるしなあ、後で返してや!」

眞琴は小さな祠に手を合わせるとビー玉を拾った。

「山の神様パワ〜!!」

眞琴が勢いよくビー玉を弾くと、ビー玉はキツネの神様の下の敷石に当たった。

「カッチーン!!」

ビー玉は向きを変えて勢い良く転がり、穴に向かって一直線に進んだ。

ポコーンと音がして見事に穴に入った。

「よしゃーあー！」

「うわっ！ ようそんなところから入れるなあ眞琴・・・天才やん！」
「あつたり前やん、山の神様パワー！」

眞琴は得意げに右の拳を上げた。

「ガム食べよつと」

神社の境内を横切ってキツネの神様の前になると、見かけない女の子がキツネの神様の賽銭箱に座っていた。

「あれ？」

キツネの神様の賽銭箱を見ると、さっき置いたガムが無くなっていた。

女の子は口をもぐもぐしながら眞琴を見ていた。

「わちゃあ、キツネの神様のガム食べたん？ お前誰？」
「りゃ」

女の子は口をもぐもぐしながら答えた。

「それ、俺のやしなあ、返してえやあ」
「無理」

女の子は愛想なく返事をした。

「眞琴、誰や、その子？」

弘もキツネの神様さんの前にやってきた。

「りさや」

「お前の友達か？」

「知らん」

眞琴と弘は顔を見合わせて、キツネの神様の賽銭箱に座って口をもぐもぐしている女の子を眺めた。

第二章 ビー玉の殺し屋

眞琴は両手をポケットに入れると首を傾げた。

「お前、どこから来たん」

「ここ」

りさはキツネの神様の祠を指さした。

「ええっ？ うそやん、それキツネの神様の家やし」

「そうよ」

りさはもう一度キツネの神様の祠を指さした。

「お前キツネの神様なん？」

「違う」

りさは愛想なく答えた。

「じゃあ何やねん！」

「キツネの神様の娘」

眞琴と弘は顔を見合わせた。

「崇じゃあ〜！」

「キツネの神様の崇じゃあ〜！」

二人は両手を上にあげると境内を走り回った。

そして境内を一周してくると、りさの前に戻って来た。

「あほ！ そんなわけあるかあ！」

眞琴はそう言うとポケットからビー玉を1個取り出してりさにひよいと投げた。

りさは眞琴の投げたビー玉を両手で受け取ると不思議そうに眺めた。

「これ何？」

「ビー玉やん」

「ビー玉？」

「知らんのかいなビー玉」

「知らない」

「ほな教えたるわあ、それ使ってええしなあ」

「俺も1個貸したるわあ、りさ」

弘もビー玉をポケットから1個取出すとりさに渡した。

「こつちやしなあ、りさ」

「こつち、こつち」

眞琴と弘は手招きをしてりさを呼んだ。

「あたし本当にキツネの神様の娘なんだけどなあ・・・」

りさは小さく呟くと眞琴と弘にもらったビー玉を眺めた。

「まあいいか、どうせ暇だし・・・」

りさはビー玉をぎゅっと握ると寶銭箱から降りた。

「まずは、この線からなあ、ビー玉を投げるねん」
「何処に？」

「そこに穴が3つ空いてるやろ」
「うん」

「まず、あそこの一番遠い穴に入れるねん」
「ふーん」

りさはひょいとビー玉を投げた。

「ポコーン」

ビー玉は一発で穴に入った。

「えっ？」

眞琴と弘は顔を見合わせると両手を上げてまた境内を走り始めた。

「崇じゃ〜」

「キツネの神様の崇じゃ〜」

「きゃあ〜 崇よ〜 キツネの神様の娘の崇よ〜」

りさも眞琴と弘の後ろについて走った。

「なんで、おまえと一緒に走るねん」

「さあ？」

眞琴と弘は後ろから走ってくるりさを見て立ち止まった。

「おまえ、上手やなあ、ビー玉、一発で穴に入ったやん、キツネの

「魔力かあ？」

「そんな力ないわよ」

「なんやあ、キツネの魔力と違うんかいな」

「違う」

りさは両手を上げながら答えた。

「何や、偶然かいな、しょうもなあ」

眞琴と弘は元の位置に戻るとビー玉を投げた。

「あちゃあ、あかん、入らんわあ」

「俺もや」

「ほな、りさが一番やしな」

「次はどうするの」

「次はなあ、こつやってビー玉を弾いて2番目の穴に入れる」

「うん、うん」

「俺か、弘のビー玉に当ててもええしな」

「そうしたら？」

「2番目の穴に進めるんや」

「ふーん」

「そんでなあ、最後に元の穴に帰ってきたら、殺し屋になれるねん」

「殺し屋って？」

「殺し屋やん、殺し屋に当てられたビー玉は死ぬねん、殺し屋はそのビー玉を貰えるねん」

「へえー面白そうね」

「最後に生き残ったビー玉の持主が勝つんや、真剣勝負やしな」

「わかったわ、こつね」

眞琴がビー玉のルールを説明すると、りさはいきなり眞琴のビー

玉を自分のビー玉で弾いた。

眞琴のビー玉はりさのビー玉に弾かれて神社の端まで吹っ飛んだ。

「キエ」

眞琴はまた両手を上げて自分のビー玉を追いかけた。

「お先に」

りさは次の穴にビー玉を進めた。

「おぬし、なかなかやるのう」

弘がりさの腕前を褒めた。

「次あなたの番よ」

「よっしゃあ、りさ、負けへんぞう」

弘は最初の穴にビー玉を入れるとりさの後を追いかけた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5501z/>

賽銭どろぼう真琴くん

2011年12月26日01時00分発行